

「イタチタケの孢子紋」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「キノコ」(木の子)は学術用語ではないので、正確な定義はない。菌類のうち、子実体(孢子をつくって拡散する器官)が肉眼で見えるほど大きいものを、一般的に「キノコ」と呼んでいる。日本人はキノコが好きで、食用にする一方、写真を撮ったり標本をつくって楽しむ人もいる。



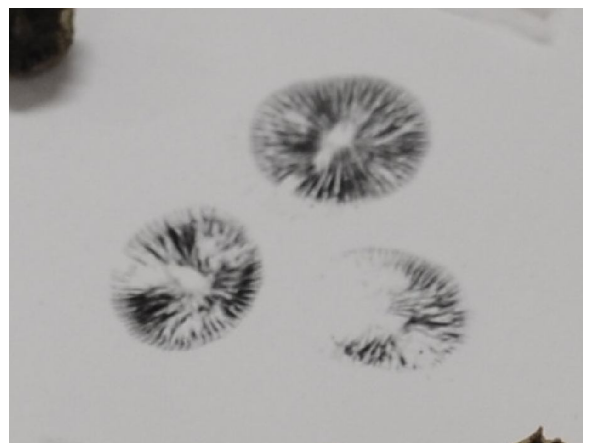
しかし、キノコは同定が難しい。似たような形態のものが多く、幼菌と成菌では大きく異なったり、天気によっても姿や色を変える。上の写真は、キツネカラカサの一種のようなのだが、正確な和名はわからない。

キノコの同定の一つの手段として「孢子紋」を観察するという方法がある。孢子紋は以下のような方法で採取する。

- (1) キノコの柄(いわゆる茎)の部分を手でぎざぎざで切断し、傘の部分だけにする。
- (2) 傘の裏側の「ヒダ」が白っぽいキノコなら黒い画用紙に、黒っぽいキノコなら白い画用紙に、キノコの傘を伏せて置く。
- (3) 孢子が風で拡散しないように、コップや茶わんを伏せてかぶせておく。
- (4) 一晩そのまま置いて、翌日そっとキノコを取り去る。
- (5) 紙の上に、孢子紋が形成されているので、その色を観察する。一部をかき取ってスライドにのせ、顕微鏡で観察することも可能。



写真は「ツルタケ」(テングタケ科)の孢子紋の採取の様子だ。このキノコはヒダが白っぽいので、黒い画用紙の上に伏せておいた。翌日、白い孢子紋が確認できた。



先日3年生の子どもが、校庭の端の林で「イタチタケ」という小さなキノコを採ってきた。標本にしてもしわくちゃで様にならないキノコだ。私はすぐに孢子紋のことを教えて、翌朝採取した「黒い孢子紋」を見せてあげた。「キノコは本当に孢子をつくっているんですね!」と結構素直に感動していた。